

ウエーク島では「餓死」ということが一般に言われました。餓死というのは栄養失調で亡くなるのですが、その栄養失調で亡くなる順番は、その兵隊たちの徴兵検査の合格した種類の順番を表していました。昔の兵隊検査では甲種合格、第一乙種、第二乙種それに丙種があり、大体第一乙種以下は兵役に採りませんでした。甲種合格でもクジはずれがあり、運がいいか悪いのか分かりませんが、クジにより軍隊に入るといのがあったのですが、だんだん兵員が足りなくなつて丙種まで入隊するようになりました。そしてウエーク島で減食され栄養失調になってきて最初に倒れて亡くなつていったのはその丙種合格の者たちでした。その次は第二乙種という具合で、甲種合格の者でも亡くなつた人もおりましたが残つた方でした。

ウエーク島の兵隊の数は、陸海軍合わせて六六〇〇人最後に残つたのは二二〇〇人ですが、八〇〇人が戦争末期に病院船で内地へ輸送されました。一二〇〇〜一三〇〇人が後に残りました。六六〇〇人のうち三三〇〇人が戦死、そのうち本当の戦死は六〇〇〇人くら

いです。後の二七〇〇人が餓死でした。

私はラバウルにいる時の体重は二〇貫（七五キロ）あつたのですが、それがウエーク島での最後の時には一三・五貫（五〇キロ）にまで減りました。ちょっとした石でもつまずいて転ぶ、手を太陽にかざすと手の骨が見える、そのくらいにまでなりました。

何とか「運」でもつてこうして生きてきたのですが、これからはそのお返しをしなくてはならないと考え、いま郷友会活動というのをやっております。

私の従軍記

入隊から中支戦線まで

長野県 中村 喜之助

「お前は外地部隊要員だから、すぐに外地へ行くようになるから、その心づもりで行け」と親戚の町役場兵事係に言われて郷里を後にし、昭和十五（一九四〇）年十二月十五日、宇都宮東部第三十六部隊へ入隊

しました。毎日、基本動作の教育の間に、午前、午後と予防接種を受け、一週間後には家族との面会も許され、宇都宮を出て、東京芝浦港から輸送船で大陸へ向かいました。

輸送船での想い出は、初年兵十人で一個班が編成されていましたが、船が玄界灘にかかった時は、ほとんどの者が船酔いにかかり、元気な者は各班一―二人で、私の班も自分一人。飯上げに行ってきたも食べる者が無い。しかし、一人で十人分を食べられるはずがなく、目ぼしい品を腹いっぱい食べました。

船酔いが治まって、皆が空腹を言い出したとき、誰かが船の中でようかんを売っていると聞いてきました。入隊の時、所持金はごくわずか許されただけで余分な金は持っていないはずが、先輩諸氏から聞いたか教えられたか、各人がそれぞれ紙幣を隠し持っており、ようかんはたちまち売り切れになったと聞きました。

長山頭入隊初夜

昭和十五年十二月三十一日、上海呉淞港へ上陸。初めて見る異国風景が珍しく、それと同時に外地へ来たのだと心身が引き締まりました。長安の歩兵第八十六連隊本部で入隊式をすませ、トラック輸送で我が第五中隊の警備する長山頭へ到着したのは昭和十五年も教時間で終えようとする時でした。

電灯の無い暗い灯火の兵舎でしたが、内務班は予想していたより整備されており、遅い時間にもかかわらず、初年兵を迎える心づくしの夕食が準備されていました。私の班は川端班長、立木、伊藤両上等兵が助手として世話をしてくださることにになりました。「今夜は遅いから食事をすませて、早く休むように」と言われ、宇都宮からの長い旅が終わり、ようやく落ち着いて寝られると床へ入りました。そして明日からの教育訓練を考え、また郷里の駅頭で見送ってくださった多くの人達を想い浮かべ、無事に任地へ着きましたと言いながら、少しうとうとした時、「起床！」という鋭い声と共に激しい銃声が聞こえ飛び起きました。

服を着て巻脚絆を着けたところで「初年兵は連隊砲

の弾を山へ運べ」との命令が出され、初めて体験する銃声と、ピューンピューンという弾の音に戦地へきた実感を強くし、夢中で真つ暗な凸凹した坂道を木杵に入った砲弾を担いで山上の分哨へ運びました。

翌日聞かされたのは、日本軍が新年の宴会を催し、飲んでいゝことを予測しての襲撃だったとのことでした。

初年兵教育

翌日から厳しく激しい教育が始まりました。昨夜銃声と弾の音を聞いていゝから我々も緊張した動作になりました。初年兵教育班は、小銃、擲弾筒、軽機関銃の三班に分かれて行われ、私は軽機班でしたから、小銃の教育を一通りすませて、軽機の教育に入りました。中隊本部前の荏山（入隊した夜、弾運びをした山）山上の分哨に配備されている軽機を、朝借りてきて教育に使い、夕方に返しに行くことになりました。軽機の勉強が始まった日に班長から「誰でもよい、起床前に起きて借りて来い。その者は点呼に出なくてよ

い」と言われました。私はそこで起床二時間前に起きることになりました。一日、二日、三日と起きてみたら、他に誰も起きる者がなく私の日課になってしまいました。毎朝早く起きて山に登ることは苦勞でしたが、起床ラッパで飛び起き点呼に出て、銃剣術でしぼられるより気が楽だったし、次のような思いもよらなかった得をしました。

山上に勤務する古參兵は九州出身の猛者が多かったが、この人達と親しくなれました。初めのうちは内心びくびくで「お願いします」「ありがとうございました」の挨拶も緊張しましたが、数日後の朝「毎朝お前だけが来るが、お前の担当か」と聞かれ「担当は決まってる。自発的に来ています」と答えました。それから「ご苦勞」と声をかけてくれるようになり、時には甘味品の飴巻を食べていけといただきました。また不寝番で同年兵が巡回中に、古年兵に内務班でしぼられました。幸い山の分哨で知り合った人がおり、私は助かったものです。

古參兵がクリークの監視に出て押収してきた干し柿

が、大きな麻袋に入れて入浴場の横に積んであるのを誰かが見つけ、入浴に行くふりをして、雑のうにいっぱい入れてきて、寝てから食べました。中国の干し柿は日本と違い、白く粉が出ていると見たのは、石灰であることを知らなかったのです。

翌日、中隊から少し離れた演習場へ駆け足で行く途中、私の横にいた戦友が、突然赤褐色をした血液のような物を嘔吐し走れなくなりました。班長の命令で助手の上等兵と二人で彼を連れて中隊へ帰り、内務班へ寝かせて演習場へ戻ったところ、大騒ぎになっていました。他にも同じ症状の者が数人出たのです。松尾教官は演習を中止し、中隊と連絡をとったところ、病人の出ているのは初年兵の軽機班だけに限られており、不審に思っただけ関係者を調べた結果、前記の事実が判明し、そこで大変、軽機班全員に重い罰が科せられ片道四キロの草原を匍匐前進で往復するよう命ぜられました。

このとき私は山の分哨の軽機を手入れして返してくるよう指示され、この苦難行から逃れることが出来

ました。夕方帰った同年兵は昼食なしの強行軍に、軍衣のズボンのひざとひじは破れ、皆ふらふらでした。

教育中忘れられないのが、大隊長命令で以前に第二大隊が苦戦した体験を忘れないようにと、三日間食事米をなくし、一食にさつま芋の小さなのが二〜三本ずつの給食に、ただでさえ腹のすく初年兵には誠に辛いものでした。

長山頭から平湖、浙東作戦を終えて紹興まで

昭和十六年三月末に中隊は長山頭から平湖へ移動しました。その日に乍浦鎮の第八中隊が敵の襲撃を受け救援に出動し、初めて敵の激しい銃撃の中を松尾教官（小隊長）に「俺について来い」と言われ、前後左右の弾着も構わず夢中で突進したことは、その後のよい経験になったものです。

四月十日からの浙東作戦には、鍵沢中隊長の伝令（当番）として参加しました。一年先輩の人が当番で私はその見習い補助でした。作戦終了後、中隊は紹興で連隊本部直轄中隊となり、ここで一期の検閲を受け

ました。

昼間の戦闘教練で分隊の二番軽機射手として行動し、終了後の検閲官の講評のとき「五中隊の軽機射手は誰か」と質問され、そばにいた助手の上等兵に「手を挙げて名前を言え」と教えられ、急いで答えたら「動作、射撃共的確で極めて良好であった」とほめられました。

その時は特別感じなかったのですが、翌日隣の内務班へ行った際、古参兵から「軽機班の中村はお前か、昨日の検閲では優秀な成績だったそうな、内地なら特別外出許可だぞ」と皆の前で言われ、前日検閲官に賞されたより嬉しく思いました。さらにこの検閲で夜間敵の歩哨攻撃のため、先頭で匍匐前進中、大嫌いな蛇をつかんで声も出せず死ぬような思いをしたことは忘れられないことでした。

この頃、軍旗衛兵に立哨し緊張した想い出もありません。検閲が終わりいよいよ中隊長の当番を引き継ぐというとき、人事係准尉から師団の暗号教育の交代に杭州へ出張を命ぜられ、「今までの者は立派な成績を残

している。負けないようしっかりやってこい」と言われて出発しました。

暗号教育から連隊本部勤務中隊復帰まで

教育は既に一週間以上進んでおり、途中交代だから追いつくのに一苦労でした。一一〇人ぐらいの受講生が毎日の成績でABCランクの席に指定されるという常競争競争でした。幸い算数は少々自信がありましたから頑張り、最後までA席で終わることが出来ました。ところが作戦中からの無理がたたり、マラリアと下痢で体重が二〇キロも減り、教育が終わると共に入院となり、杭州の陸軍病院で四十日療養し、退院と同時に連隊本部暗号班勤務を命ぜられ紹興へ戻ったのは反撃作戦の後でした。

第八十六連隊暗号班は師団の部隊対抗競技会では常に優秀な成績を残しており、私が勤務中の昭和十七年春頃と記憶しておりますが、競技会に同年兵三人で参加して、優勝することができ、班長以下六人大いに喜び合いました。

暗号班は特殊勤務個所で連隊副官直屬で「無用の者入室禁止」になっており、初年兵の我々にも、不寝番勤務、使役、飯上げ等の割り当てはなく、また業務上「公用腕章」が常備されており、それで班内の話し合いで交代で買物や食事に外出することを他の勤務個所の古参兵は知っており、妬みもあって、暗号班の初年兵は生意気だと言われましたが、自分達は楽しい勤務で、お陰で体重も増え作戦参加時には苦勞しました。

昭和十六年十二月から翌年一月にかけての第二次長沙作戦、昭和十七年四月三十日から九月までの浙贛作戦は連隊本部暗号班として通信隊と行動を共にし、上饒（広信）まで進み、反転後、年末前に十六年徴収現役兵の教育掛集合教育を受けるため中隊復帰命令が出ました。

中隊は金華郊外に駐留しており、ここでは初年兵教育助手を勤めました。軍旗祭には中隊は栃木の和楽おどりをだし、その伴奏の樽たきをさせられました。

昭和十八年の初め頃と記憶しておりますが、松尾中隊長（初年兵教育時の教官）が上海へ出張するから同行

せよと話があり、今さら当番も思いお断りしましたが、「何もしなくてよい」とのことでお供しました。中隊長はガーデンブリッジの将校宿舍泊まり、私は兵站宿舍でした。着いた日に中隊出身で特務機関勤務の一ノ瀬さん（同年兵）と憲兵隊勤務の久保田さんが面会に来られました。

二泊三日で中の一日私は用事が無く「見物して来い」と言われ、北四川路等の繁華街から外出禁止になっていた租界内まで「公用腕章」を付けて歩き、思いがけなく、上海の見物が出来ました。

後日、昭和五十八年に第五中隊有志で訪中の旅（如月訪中団）に行った時、前記将校宿舍（現華僑飯店）で昼食の機会があつて懐かしく思い出しました。

義 県

昭和十八年三月、金華を出発。義県に移り、第二大隊本部と県城内で警備につきましたが、ここは私には懐かしく思い出の多い街になっています。物資は豊かで果物も豊富でした。昭和十七年徴収の現役初年兵の教育を担当しましたが、仮設敵に出た者が桃を雑のう

に入れてきたり、日曜日に内務班全員でピロ畑へ行き
代金を払って、腹をこわさない程度に食べると言いな
がら存分に食べた想いもあります。

三月二十七日、第八中隊の駐屯する新昌の情況が悪
いとこのことで、機関銃中隊から森中隊長以下一個小
隊、第五中隊から亀島中隊長以下一個小隊が出動し、
黄坦村儒蚕市の戦闘がありました。

保安隊教育も楽しい想い出

第二機関銃中隊から教育責任者の将校が出、第五・
六・八中隊から下士官が各一人出て、二カ月間で小隊
の戦闘教練までを目標として、新たに編成された保安
隊三個中隊の教育を担当したものです。

保安隊長は担当年配者で階級は中佐と記憶してお
り、隊員は基準では十六歳から四十五歳までとして各
部落へ割り当て、動員されて編成したもので、年令に
は大きな差がありました。私達下士官三人は大隊本部
へ宿泊して通い、一人が一個中隊を担当しました。私
の担当した中隊は総員一七〇余人で中隊長の下に小隊
長が二人いましたが、中隊長、小隊長共に台湾出身者

でした。本部に通訳が一人おりました。隊は県城内の
街の中に各隊毎に分かれて宿舎があり、教練は東門外
の草原になった広場で行われ、装備は小銃が中隊に数
丁あったのみで教練には使用しませんでした。

責任者将校は初日と最終日出席したくらいで、計画
から実行すべて三人に任されており、三人で取りあえ
ず目標までの大綱を作りましたが、無理な目標であり
責任のないようなことですから適当に過ごすことにし
ました。私は初日広場で整列して迎えてくれた隊員を
見たところ、年少者は十二、十三歳くらいの少年が二
人、年長者は五十歳を超えているように見受けまし
た。中隊長に少年二人を私の当番にしたいと申し入れ
了承を得ました。

翌朝から、当日の教練日課を中隊長と打ち合わせ、
実技は彼等に任せましたが、ほとんど小隊長が指導し
ていたようでした。私は当番少年と木陰で内地から送
られた慰問袋の絵ハガキや物品を自分の中隊の内務班
から集めてきてこれを与え、日本の現況を伝え、彼等
から土地の日常生活を聞いたり、時には広場から道路

の向かい側にある万頭屋で肉万頭を食べたりして楽しく過ごしておりました。

ある朝隊員が、何だかわからないが、恐ろしい仕方で夜眠れないと言うのです。教練を中止して聞いたところ、宿舎に夜間化け物が出るとのこと。馬鹿な、野良猫の目でも見たのではないかとたどりましたが、彼等は真剣に化け物だと言い張るので、早目に教練を終え、通訳を連れて宿舎へ行き、化け物の出た時間、場所、状況を数人から聞き調べましたが、確固たることはつかめず、中隊の幹部と対策を協議したところ「お破いをしたい」とのことで、私は隊長の了解を得て「お破い」をすることになりました。

翌日どのようなことをするか、私も興味深く内心楽しみに出かけました。宿舎の中央に立派な祭壇が設けられ、大きな豚の半身を中心に種々の物が供えられていて、隊員全員が整列した前で、祭事を司る者が長々と呪文を唱えて終わりました。そして供物が料理され、ご馳走が出て宴が催されたのです。彼等のご馳走を食べる目的で騒いだのか、とも考えましたが、多く

の者が真剣な眼差しで訴えていたのだから、嘘ではなかったと思い、その後は化け物の話は出ませんでした。

彼等の中には皮膚病とマラリア、下痢患者が多く、教練を休む者が多いので、三人ではかり、日曜日に各宿舎を治療に回ることになりました。

三人が自分の所属中隊の内務班に放置されている慰問袋の品や薬品を集めてきて、急造の医療班となり、各宿舎で一人が患者全員を整理させ、一人ずつ病状を聞いて、外科、内科に分ける。外科担当者は、患者のほとんどが皮膚病だから、保革油へ赤チンを入れてこねた薬、ヨーチンを塗った治療ですませる。内科担当者はマラリア予防薬、下痢の軽い者には梅の精、重い者には正露丸をいずれも一〜二粒与えました。この治療が予想外に効果があり感謝されました。

ある日治療に回っていたら崔少年が来て、急いで来てくれとのこと。事情を尋ねたら家族が面会に来て、母親が発熱したとのこと。少年の案内で南門外の伯父の家に行くと、母親が寝ており、私はこの病状をマラ

リアと見たので、その薬を与えました。雀少年は良家の出身だろうと感じてはいましたが、この家の主人が少年の母親の兄で土地の有力な商人であり、少年の家も当地から十キロほど西方の街の財産家、有力者で、彼の上に姉が二人おり当日も来ていました。

割り当てで仕方なく少年を出したが、幸い私にかわいがられ楽な日々を送っていることを聞いて承知しており、皆さんから大変感謝とお礼を言われました。

この事が縁でその後も何回か伯父の家を尋ねたし、教育の終わりがらだった大隊が少年の街の方へ警備行軍に出た時、保安隊も夜行軍を含めた行軍演習として大隊長の許可を得て、部隊に追従し少年の街で一泊しました。少年の家では是非夕食にきてくれとのこと、同僚の了承を得て行ったところ、一族が集まって大歓迎してくれました。そして両親が「当家では少年のほかは娘で心配だから少年の力になってほしい。日本軍を離れて娘二人のうち、姉、妹どちらでもよいから結婚してくれ、そしてここから東の山の向こう四〇キロの海岸に別荘がある。娘の他に下男一人を付けてやる

から、一二年行つて言葉等を勉強して帰つて来てくれ」と頼まれましたが、私は返事ができませんでした。

出発前、最後に少年の伯父の家に招かれて、別れの宴を催してくれた時、母親は泣いて別れを惜しんでくれました。

昭和十九年元旦、非常召集で起こされ、駆け足で東門外へ行ったところ、剣江の中へ入るよう命令が出ました。禪一本で腰まである冷たい水流の中で、しばらく大声で天突体操を行い、支度をして再び駆け足で城壁へ着いて、これをよじ登って城壁上を山の中腹まで走つてようやく終わりました。年始早々川でみそぎをさせられ、それから六カ月後には海へ入ることになったのです。

呉淞集結と輸送船

昭和十九年五月、南方転進のため嶺南を出発。上海呉淞の日東紡宝山に宿泊して乗船を待ちました。毎日訓練は宿舎を輸送船と仮定して窓から脱出すること

でした。各自に麻縄とサメ除けの赤い布が支給されましたが、海没の時大いに役に立ちました。

内地から慰問団が来て、見る機会を与えられました。私は一度行った時、渡辺はま子さんが支那服で大きな扇を持って唄われた「蘇州夜曲」は懐かしい思い出になっております。煙草が沢山支給されましたが、南方へ行って補給がなければ苦しいから、今のうちに禁煙しようと呼びかけ、同調者と共に支給された煙草を庭へ積んで焼却したものです。

六月二十四日呉淞港を出港。第五中隊は「第二十八共同丸」へ乗船しましたが、この船は徵用前、瀬戸内海あたりの観光船だったとのこと。二〇〇〇トンくらいの小さな船で小隊が指定の船室の片隅に兵器を集めて置き、勤務者を除いても小隊全員が寝られない状態で、そのうえ船室は蒸し風呂のような暑さで、各自がそれぞれ部屋を出て甲板上の適当な日陰を求めて居座り、部屋にはおりませんでした。

台湾の高雄へ寄港した時、港の入口から奥へ沈んだ船の帆柱が点々と続いているのを見て、多くの海没船

に不安を感じました。二日駐留したと記憶しています。が、上陸許可は出ず、印象に残ったのは支給されたバナナの美味です。その後南方に行った際、また戦後台湾旅行の折、心掛けて探しましたが、あのような青くて細長く弓なりになったバナナにはお目にかかることは出来ずにあります。

高雄を出港し、南シナ海東沙島沖で、敵の潜水艦から魚雷を受けて乗船した船が海没しました。